［研究論文］

都市に基盤をおいた謡曲愛好家集団
—梅原稔「青森に於ける謡曲」を中心に—

奥山けい子

1. はじめに

明治維新後、能とその声楽—謡を取り巻く環境が大きく変化し、諸地域における様相も変わった。筆者はこれまで山形、岩手、宮城における能と謡の姿を明らかにしてきた（奥山　2006）。これらは江戸時代から藩の中で能が親しまれ、明治維新の危機をのりこえて存続させた地である。しかし明治期に入って初めて能と謡が根づいた地もある。根づかせるために、どのような力が働いただろうか。本稿では青森市を中心とした謡曲界の形成過程を述べ、明治以降の地方都市の能の文化の展開を解明する一助としたい。

2. 記事の概要

ここに取り上げるのは「青森に於ける謡曲」という記事（梅原　1934）で、関東地方から青森市に転入した歯科医が謡を習得し、この地に能の文化を育てる様子を描く、珍しい読み物である。全体は次の30節からなる。各節の見出しを下記に示す。節の順番の数字は筆者がつけた。多くは太字の見出しだが、太字でない見出しがあるので、それは括弧に入れた。第1節は無題である。

1. [無題]　2. 金剛流の勃興　3. 青森宝生会の実現　4. 小久保翁の小歴　(5. 仕舞研究会)　6. 青森宝生会の発達　(7. 八戸同好者女鹿左織氏来訪)　8. 青森の大火災難　9. 青森宝生会の復興及小田護一氏招聘　10. 復興第一の宝生会大会　(11. 青森大林区の謡曲振興)　(12. 泉助三郎の今様能の開演)　13. 野村萬造一行来青　14. 囃子研究会の組織　15. 小鼓弥助の胴と折居の胴　(16. 黒石に於て囃子会開催)　(17. 波吉外次氏来青)　18. 青森狂言会　(19. 青森宝生会の大会を弘前市に開催す)　20. 本間広清氏来青　21. 瀬尾要氏来青　(22. 朝比奈林之助氏の来青)　23. 青森宝生会の隆盛期　24. 演能会　(25. 古間木事件の突発)　(26. 大和田三治氏と渋谷七重氏)　(27. 斎藤篤氏の招聘)　28. 八戸謡曲界の思出　29. 野辺地に於ける謡曲発達の回想　30. 宗家宝生重英氏の来野

これら30節の内容は8つのまとまりに分かれる。それぞれ（ア）から（ク）まで符号を付け、概要を下記に示す。

（ア）第1節　梅原の来青、謡との出会い

歯科医・梅原稔は仙台に生まれ育ち、幼い時に能・狂言を見て興味を持った。彼は1899年、青森市に転住した。1901年に、同業の医師・小嶋栄の初老の賀（42歳）の祝宴会で宝生流や高安流の謡を聞き、1903年に青森師範学校図書の教諭、青森病院の薬局長、医師2名とともに宝生流に弟子入りした。師匠は旧会津藩士で、青函連絡船・日本郵船の肥後丸船長の父であった。師匠の稽古は厳しく、翌年2月初めころ稽古は中止となった。

（イ）第2~4節　津軽の高安流と新興の宝生流

第2節の見出しは金剛だが、内容はワキ方高安流のことである。ワキ方高安流は江戸時代に金剛流の座付きだったので、両流は関係が深い。

弘前・津軽藩の役者、高安流の高安正治が維新後に落魄して東郡蟹田村（現東津軽郡外ヶ浜町）に閑居していたのを、高安流の愛好者と前青森町長が相談して青森市に招き、老人組の謡曲会を組織した。高安正治の門弟には青森土着の人が多く、大会を開いたり、弘前の喜多流会と合併して大会を開いたりしていた。

1905年、金沢出身の開業医で加賀宝生（加賀藩ゆかりの宝生流）を習った中村文雄、彼と知り合った青森保線区主任の宝生流愛好家、鉄道職員の同好者と梅原の4人が相談し、弘前在住の能役者・小久保彦十郎に出稽古を求めた。

（ウ）第5~7節　仕舞の稽古と県内の連携

梅原は1909年、高安正治から仕舞の稽古を受けるようになり、後に宝生流の師匠・小久保に替えた。扇の持ち方、足の運び方、左右、開き方等が大変違っていた。宝生流は隆盛となり、小久保の門下生のいる青森、弘前、大館は毎年2回、連合会を行った。1909年、八戸の謡曲家・女鹿左織が青森を訪問し、素謡会を開いた。

（エ）第8~11節　青森市の大火と復興

1910年、青森市は大火となった。梅原も被災し、小久保から預かった謡曲本等を焼失した。また青森宝生会は活動停止状態となったが、翌年頃から再び組織立った。

1911年頃、福島市にいた師範・小田護一を招くことになり、復興第一の宝生会大会が　1912年1月行われた。

（オ）第12~21節　今様能の興行と能の受容の多面化

今様能を興行し、野村万造の狂言会を青森で開催し、囃子の稽古を始めるなど、弟子たちが企画して多面的な活動が広がった。1914年、金沢の能楽師・波吉外次が来青したので、宝生会が歓迎謡曲大会を開催し、その後も出張稽古が続いた。1914年、宝生会幹事・本間広清や能役者・瀬尾要が来青した。

（カ）第22~24節　朝比奈林之助の来青

鉄道院の朝比奈林之助が来青して仕舞を教え、能役者・鳴原清兵衛を紹介した。1916年、青森宝生会は演能会を催し、鳴原が能を舞った。

（キ）第25~27節　古間木事件の突発と愛好者の減少

1916年、鉄道事故・古間木事件が突発した。下り青森行き臨時列車が、古間木（三沢）を発車した上り列車と正面衝突をして多数の死傷者を出した事件で、鉄道関係者は謡曲をやめ、囃子会も中止となった。

高安正治が亡くなってから、高安の弟子は宝生に流替えをした。宝生流の斎藤篤氏の招聘は1920年であった。

（ク）第28~30節　八戸と野辺地

梅原は八戸や野辺地で診療や俳句の集いを行い、その地でも謡に親しんでいる。野辺地に宗家宝生重英を招聘したことは野辺地の誇り、と梅原は書いている。

上記の 8 章それぞれに、明治期の地方の能の特徴が表れている。それを次節から明らかにしていきたい。

3. 仙台と青森ー第 1 節から

著者・梅原稔（1876－1958）は青森市の歯科医の草分け的存在で、県歯科医師会長を務めた。ホトトギス派の俳人で号は薫子、自宅に閑梅居句会を開いた。桂浦と号し俳画を趣味とした（加藤2002）。

梅原が初めて能を見たのは、小学校三年生位である。通学していた仙台東二番丁小学校の記念の催しとして演能会が開かれ、学校の隣の本願寺別院の大広間で、生徒の大半が礼式実習の授業の時のように袴をつけ、喜多流の能〈高砂〉〈船弁慶〉と狂言を見た。この時の小鼓役の老人は学校守で、大鼓役は学校近くの呉服店の主人であった。実は、梅原は幼少の時から神楽が好きで、神社の例祭は少し遠くても熱心に見に行き、友だちを集めて神楽のまねをして遊んでいた。始めて見た演能は退屈もしたが、興味も感じた。

明治維新後、伊達家の能装束・小道具は平泉の中尊寺に納められたので、仙台で例祭・招魂祭などがある時は必ず中尊寺から僧が来て、演能を奉納していた。梅原は初の観能の後、それを見るようになった。

上述のように小学校の催しで演能があり、その演者が児童と親しい学校守や商人であり、寺社の祭礼でも演能があるという仙台は、能が大衆的な芸能である土地であったと言える。

それに対して青森市は、市民の多くが能を知らないという土地であった。梅原が能に再会した祝宴会は医師や銀行支店長の集まりであり、梅原とともに宝生流に入門した 4 人は医師と薬局長、師範学校教諭で、いずれも明治維新後に生まれた職業である。入門の世話をしたのは医師でメソジスト教会の信者であり、教会の主催者が同郷（会津）の牧原を師匠として紹介したのである。謡は、新興のキリスト教の縁によって、新しい職業に従事する入門者が生まれるという種目であり、新都市・青森における新しい文化の象徴と考えられる。

4. 能役者　高安と小久保ー第 2～4 節から

高安正治が青森市に招かれて、老若に稽古を広げた。また、加賀宝生の愛好家の医師が青森市に移住してから謡の仲間が集まり、弘前在住の小久保彦十郎に出稽古を求めて、青森宝生会が実現した。会員は鉄道 2 人、郵便局 3 人、町方 5 人（うち 3 人は医師、2 人は職業不明）である。ここに描かれているのは、旧藩役者と、もと町人の能愛好家という、経歴の異なる 2 人である。

高安正治は1915年3月20日、78歳で没したワキ方高安流、家元彦太郎の分家、元津軽藩役者である（1927　横山）。梅原によれば、高安を蟹田村から招いたのは小嶋清慎と小田桐勝英（1834－1917）である。小嶋は前節の祝宴会の本人・栄の父で、高安流の幹部であった（梅原稿第5節）。小田桐は弘前藩士・花田寛兵衛の子で鰺ヶ沢の士族・小田桐家の養子となり、1897年まで青森町長であった（肴倉　1969）。彼は袴能を演ずるほどの能の愛好家である（梅原稿第2節）。

高安を中心とする老人組の謡曲会の会員に、渋谷七重の父がいる。渋谷七重（1886－1933）は青森市安方の人で安方町郵便局長、謡曲、絵画に優れたという（肴倉　1969）から、これは老人組の謡曲会で青森市にまかれた種の果実かもしれない。

梅原は高安正治が河東碧梧桐の前で謡い、「現代田舎にも斯様な立派な謡手があるかと頻りに賞賛したと云ふ」と書いている。この時のことは碧梧桐も記録していて（河東　2008年）、1907年5月12日の条、陸奥青森の記事に「高安某という高安流の老人と会した。弘前の人であるそうな。高安流といえば、今は家元も確立していない、能楽界の一隅に僅に余喘を保っておる流儀に過ぎぬけれども、老人の謡は、力の籠った荘重な趣きがあって、旅中始めて謡らしい謡を聞くような心持がした。四十年来謡というものを口にもせなかった、と謙遜の詞はあったが、昔の人の稽古はどうしても違う処がある。」と書く。ここで高安の発した「40年間の空白」とは、藩のお抱え時代と、明治期の生活の差を表した言葉であろう。後に高安が亡くなって後、弟子は宝生流に替わってしまう（梅原稿第26節）。

おなじく津軽藩の能役者でよく知られているのは紀淑真（1847－1913）で、維新後は上京して宮内省皇太后宮属となり、喜多流宗家に六平太能心を擁立し補導した（高橋　1999）。津軽藩の能役者は、このようにして青森から姿を消してしまった。

もう一人、小久保彦十郎は豊橋魚町の出身である。明治初期から蚕糸業と桑樹の植栽改良を図り、東北地方から蚕卵紙を求めて有志に分かった（豊橋市史編集委員会　1983A）。1878年、士族授産の方途として小久保たちが中心となって、愛知県から資金貸与を受け座繰製糸場を開いたが欠損を出し、1885年には県に借金の延納願を出して弘前に移住し、養蚕業に従事したが失敗、りんご栽培に成功した（豊橋市史編集委員会　1983B）。弘前の南方の清水村樹木に1890年開園、面積は15町、とされる（波多江；斎藤　1977）。

豊橋は吉田藩の城下町であるとともに東海道の宿場で港町として繁栄し、能が盛んな土地だった。明治の廃藩の後、1874年に小久保ら魚町の能愛好家が能面、能装束を300円で譲り受け（豊橋市史編集委員会　1975）、1886年に小久保が弘前に移住のため抵当に入れたのを魚町有志が買い戻し（豊橋市史編集委員会　1983C）、現在も魚町能楽会の所蔵として受け継がれている（国立劇場能楽堂調査養成課　1988）。

梅原稿での小久保の発言を略記すると〔私は能装束を人手に渡した時は再び謡曲を謡わないという決心だったから、弘前に来てから謡曲の話さえしなかった。ところが弘前騎兵連隊長の邸に年賀に行った際、年賀客の師団経理部長は祝言として謡を謡ったので、自分もうかうかと釣り込まれて

謡の禁を破った。騎兵連隊長と師団経理部長は謡技能に感嘆し、ぜひ弟子を取って指導してほしいと勧め、私も人に教える気になった。］この師団経理部長は仙台の人で、藩政時代には喜多流の謡を修業していたのである。

1900 年 9 月 15 日『東奥日報』によると、小久保は長勝寺で開かれた弘前音楽会で、謡曲〈鉢木〉〈一字題〉を演じた。江戸時代の弘前では能が盛んだったことが、記事で懐かしまれている（「雅楽、謡曲の如きは世人の聞を得さりし所なるを以て今日之を聞き遠く三十年前　藩政当年の盛時を憶ひ起せしにや　暗然として坐ろに懐旧の涙に禁へさる故老も見受けられたり」（青森県　2003））。

藩の抱え役者・高安正治は廃藩による引退後に復活し、町人の能役者・小久保彦十郎は明治期の新事業失敗と成功の後に復活した。二人を危機から救ったのは、古くからの能愛好家である。

5. 青森の能の発展　仕舞稽古、県内の連携－第 5～7 節から

梅原が仕舞の稽古を受けるきっかけは、医師の小嶋栄（梅原稿の第 1 節に登場）が高安正治に入門して謡を始め、次に仕舞を習うために仲間を募ったことであった。この時、青森市の仕舞の稽古が始まった。

1909 年に青森を訪問した女鹿左織（1867－1954）は、教育者で書家である。八戸は江戸時代から藩主の南部氏が能を愛好した土地で、藩士の女鹿宗容（左織の父）は玄人同様の名人とされた（Anonymous 1　1990）。

6. 大火の影響と復興後の繁栄－第 8～11 節から

梅原は 1910 年の青森市の大火で、小久保から預かった謡曲本等を焼失したことを嘆く。宝生九郎の朱が入った貴重な本だったからだ。この時代の謡本は胡麻節だけしか記さず、上ゲ下ゲの点や当リ、クリ節、持合、扱イ、謡い方、序破急、抑揚等の節扱いは、師匠が自ら朱入れをしてくれ、あるいは自分で朱入れをしたので、家元の朱は実に貴重だったと、梅原は語る。謡本に朱を書き入れるのは煩雑で、一番の朱入に 2 時間位かかる。昭和版が総ての節扱いを付して販売されるようになったのは幸福だと、彼は書いている。たしかに謡本の朱は重要で、1 冊しかない謡本を失ってしまう火災が謡に与える影響は大きい。

また青森宝生会の会員も被災し、小久保の稽古は中止となった。しかし復興は早く、梅原は避難先の浅虫から 9 月に青森に戻った。翌年 2 月ごろ、青森駅長として福島から転任した杉本直寛を招いた素謡会が、復興第一の集まりとなった。

杉本のあっせんで 1911 年頃、福島市にいた師範・小田護一（東京生まれ）を招聘することになり、復興第一の宝生会大会が 1912 年に行われた。新会員の藤原柯芳（1879－1958）は秋田から青森に移住した俳人である（板谷　1969）。またこのころ青森大林区（後の営林局）署員に謡曲が広まり、観世流と宝生流が連合して大会を行った。

7. 青森に来た人々ー第12～21節から

前節で述べた杉本は、旅館の主人に今様能の興行の建元になってもらい、青森市歌舞伎座と弘前の柾木座とで二夜公開した。梅原の発言を略記すると次のようである。［杉本の謡曲は鉄道部内では有名で、北海道との連絡関門たる青森駅長であった関係上、種々な同好の士が北海道旅行の往復又は出張旅行の途に立ち寄るので、いつも鉄道倶楽部内で謡曲会を開催して聴く機会があったので、有益だった。謡曲に関係ある者や画家などで杉本に世話になった人は多かった。現に今、青森に来ている観世の田村師匠などはその一人で、はじめ杉本をあてに突然来たので、宝生流の人たちが旅館で歓迎会の謡会を催した。その時には町の方面の観世の同好者としては、日本郵船会社の支配人が一人だったので、杉本はその支配人とともに田村のために謀り、青森観世会を組織して、毎月田村氏が来青するようにした。］

この発言は、青森市の土地柄をもよく示している。青森は1804年に函館への飛脚問屋取次所を営んで月6回ずつ荷物の取次をしたのが定期交通の始まりとされ、1873年に青森と函館の間に定期航路が開設された。1891年に東北本線が全通して青森駅が開業した。1908年に始まった国鉄青函航路は1日2運行の体制となった。日本郵船も1910年まで青函航路を続けていた（青森駅会場百周年実行委員会　1991）。青森市は北海道との通運に不可欠の地だったのである。

その通運の要というべき青森駅長の杉本が謡愛好家であるため、北海道に渡る能役者たちの動向を機敏につかみ、青森市で演ずる機会が作られ、愛好組織さえ作られたことを梅原稿は示している。杉本は1918年東京秋葉原駅長に転出するまで7年間、師匠をあっせんしたり囃子会の地謡を勧めたりして、青森市の謡曲会に大きく貢献した。

1914年、東京音楽学校囃子科第1期の卒業生の能楽師で金春流太鼓方の佐藤順造を招いて、囃子研究会を行うようになった。佐藤は函館に毎月出稽古していたので、青森に立ち寄ることになったのだ。この会が生まれてから謡曲は急に賑やかになり、観世流の愛好家の女性会員が生まれた。囃子の会員は古胴を求めるようになった。千曳駅助役の平出は父が津軽藩の小鼓の家元で、津軽藩士から拝領した小鼓を持っていた。その胴が会員の手に入ったので、平出の父に打ってもらう機会を作ったが、平出の父は、「廃藩以来何年となく鼓を取った事がないからだめだ」と謙遜して打たなかった。もう一挺は岩手県や山形県で発見され、会員の手に入った。仙台から売物に出た鼓もある。1916年、黒石で囃子の会のため、囃子の会員4人が佐藤師匠とともに出かけ、黒石駅近くの寺の座敷で囃子会を開いた。囃子会は1915-6年頃まで全盛を極めたが1917年自然散会した。この時代に四拍子が揃ったのは青森県下で恐らくは青森ばかりである。

また1914年、金沢のシテ方宝生流能役者・波吉外次が来青したので、宝生会が歓迎謡曲大会を開催した。その後は弟子・塩川が3ヶ月に1度位ずつ呼び、稽古した。梅原は仕舞を習った。父の波吉宮門も同道したことがあり、小舘保次郎邸での大会で謡ったことがある。この小舘保次郎（1877－1935）は製材業で、青森のヒバ（ヒノキアスナロ）林業の先覚者である（南　2002）。波吉は塩川が青森に居住した時期には、北海道に行くたびに立ち寄った。

同年、野村万造が北海道巡演の途中に青森市に立ち寄った時、杉本が提案して有志が万造、万作、万介に 2 日間習い、公演した。梅原の舞〈掛川〉、渋谷七重の〈蟹山伏〉、他に〈清水〉という演目である。素人の公演はその後も数回催した。

なお同年、弘前で小久保の古稀祝謡曲大会が開かれたが、小久保はその後病を得、1918 年 74 歳で亡くなったと梅原は書く。

こうして青森市の宝生流は大火後、再び活発となった。

8. 朝比奈林之助と鴫原清兵衛ー第 22～24 節から

梅原は朝比奈林之助と、能楽師・鴫原清兵衛について語る。朝比奈は鉄道院技師（鉄道国有化に伴い、1908 年に設置された中央官庁。鉄道省の前身）運輸課長で、日本鉄道が国有鉄道に編入した際、日本鉄道会社に精勤した功労金 2 万円で能装束一式と面小道具を買収し、新潟の宝生流能役者の鴫原清兵衛に保管させ、鴫原から能を習得した。地方出張の際に、必ず仕舞袴と扇を行李の中に準備していた。その時代の鉄道部内で宝生の謡曲熱は旺盛で、事務所長会議の慰労会は必ず催能会であったという。朝比奈が初めて 1915 年に青森管内を職務視察に来たとき、愛好者宅に招待されて〈実盛〉を演じ、視察の 2、3 日の間に仕舞を教えた。数ヶ月 1 度位、東北方面の巡回のつど、日曜日祭日の 1 日をくり入れて青森に来て、休日は有志者に仕舞を熱心に指導することが満 2 年位続いた。

朝比奈林之助は 1869 年、東京の麹町生れで旧幕臣の二男である。九州鉄道株式会社に入り 1900 年退社し（五十嵐　1987）、北越鉄道株式会社に入社し、鉄道国有化後、中部鉄道管理局営業課長となる。夫人は秀子、一男は隆（古林　1987）。1917 年頃、鉄道院理事で退官した後、蒲原鉄道設立をめざした。彼は旧川内村門原の白滝鉱山の所有者で、鉱石の輸送手段として鉄道を敷設したかった（村上　2001）。蒲原鉄道株式会社は 1922 年設立、翌 1923 年に開業し、蒲原鉄道は 1998 年全廃している（寺田　2003）。

この一男・隆とは指揮者・朝比奈隆のことで、林之助の養子である。彼の自伝によれば、林之助は鉄道省を辞めてから東洋電機専務となり、製鉄会社を経営したが、第 1 次大戦後の不景気で倒産し、事業整理に当たって能面や装束を売り、1923 年に亡くなった（朝比奈　2001）。朝比奈家は幕末時代に長唄を教えていたという（朝比奈　1985）。

また朝比奈の能愛好は宮城道雄にも知られていたようだ。朝比奈の妻は宮城に箏を習っていた。宮城は「主人の朝比奈氏もその方に趣味を持っていたので、ちょいちょい家を使わせてもらっていた」（宮城　1972）。「その方に趣味」とは、日本音楽、具体的には能を指すのだろう。宮城の『薤露調』は朝比奈林之助の霊に捧げる曲で、1923 年作られている。

朝日奈が師事した鴫原清兵衛は 1916 年、青森宝生会の演能会に来青し、会員は鴫原から朝晩火の出るような稽古を受けたと、梅原は述べる。

鴫原清兵衛は金沢出身、シテ方宝生流の能役者である。佐野によれば、鴫原は紙谷一宗という長

者の孫で、宝生紫雪（1861年没）から能を習っていた。「久しく本郷湯島辺りに住居して居たが、去秋の一葉散る頃共に夜を去った彼の鳴原清兵衛の祖父に紙谷一宗と云ふ長者があった。今も尚ほ金沢は…稲荷寺中に一宗の別墅があった。紫雪翁は其家に寓居された。そこで清兵衛も大夫直々に口授も得たのである。」（佐野　1923）。

鳴原が金沢で出演する番組は1893年から1902年まで確認できる（金沢能楽会100周年記念事業実行委員会　2000、倉田　1995：1996：1998）。1917年2月に東京で、4月に新潟市でも演能記録がある（長山；西村　2005）が、1922年に没した。

鳴原が朝比奈と出会い、後援を受けたのは、1900年に朝比奈が北越鉄道に入社した後で、鉄道国有化に際して朝日奈が得た功労金で求めた面・装束を着けて演能したのは、1908年以後から1920年頃の不況までだろうか。朝比奈より1年早く没した鳴原の晩年は静かだった。

このように朝比奈と鳴原が青森にかかわった時期、1916年に青森市で初めての演能会が開催された。秋田、盛岡、青森県の謡曲同好者など二百余名の観衆が集まり、能〈羽衣〉〈猩々〉と狂言〈茶川〉が演じられた。玄人は鳴原清兵衛、佐藤順造が出演したが、ほかは素人で、青森宝生会の繁栄の絶頂だったと梅原は言う。能装束と道具は函館宝生会と朝比奈のものを借りた。

この時の会員は鉄道12名、大林区2名、検事1名、ほかに9名が挙げられていて、うち1名は郵便局長、2名は医師で、1名は政治家である。官吏が多数を占める集団である。

9. 青森の謡曲を支える鉄道関係者ー第25～27節から

1916年の古間木事件は鉄道事故だが、交通だけでなく、青森の謡曲界に深刻な影響を及ぼした。鉄道関係者は謡曲を謹慎したので第2回演能会は中止となり、囃子会も自然中止となった。

前述したように、1916年の会員24名のうち半数の12名が鉄道関係者である。しかも青森駅長・杉本直寛や鉄道省・朝比奈林之助など、稽古のほかに師匠を招き、興行も企画するマネジメントも行う。このように重要な役割を果たす鉄道関係者は、しかしながら転勤して来ても、また転出してしまう。異動は法律関係者や医師も同様である。それは青森市の謡曲界を急速に発展させ、急速に衰退させる。

いっぽう高安正治の一周忌の後、父の代からの弟子・渋谷七重は、宝生流に流替えをした。そして宝生流の師匠・斎藤篤（秋田生まれ）が予審判事によって1920年に招聘されるまで、青森宝生会は停滞期となった。

10. 八戸と野辺地の謡曲ー第28～30節から

八戸では1913，4年頃、会津出身の謡愛好家の紹介で、福島県出身の武田喜男（後の武田光雲、シテ方宝生流の能楽師1977年没、81歳）が師匠に招かれた。

野辺地では俳人の謡の稽古が始まり、1919年から斎藤篤が教えることになったと梅原は書く。野辺地の事情は「野辺地謡曲史」に詳しい。野辺地は南部藩北部の唯一の商港として栄え、藩主は

宝生流に親しんでいた。明治維新の際、会津藩士の多くは南部領（殊に野辺地方面）に避難する者が多く、会津藩士の謡曲の指南・高木が野辺地に来住し 1884 年頃から謡を教えた。1903 年頃、医師・中村文雄が宝生流の指導をした。1911 年頃、俳人・津幡秋来が来て俳人（中村泰山、野坂十二楼など）が集い、句作後に謡を謡った（Anonymous 2　1934）。

会津藩は戊辰戦争後、斗南藩を立藩して開墾したが、野辺地はその一部なのである。高木とは函館に移住した高木直衛であろう。高木は 1839 年生まれで、戊辰戦争後、藩主に従って越後高田に落ち、また南部に移り、商人となって札幌、函館に居住し、謡を教えた（金子；高野　1914）。北海道と青森県を行き来する謡曲家である。高木や前述の牧原など、会津出身者も青森県の謡曲界に影響を及ぼした。

なお中村文雄は梅原の友人で金沢出身の医師であることは２．の（イ）に述べた。

11. 青森の謡曲界の特徴

これまで見てきたように、19 世紀初めの青森市の謡曲界は、謡を愛好する東北地方各地と比べてみると、次のような特徴がある。

1　構成員は鉄道、営林関係、官吏、医師が多く、転勤者の懇親集団ともなっている。
2　師匠の出身地は会津、豊橋、津軽、秋田など多様である。
3　他地域（北海道、東京、福島など）との人的交流が多い。
4　弘前、野辺地、八戸、黒石など、県内各地と接触し、協働している。
5　大火と鉄道事故が大きな打撃となった。

これらの特徴の要因は、青森市の謡曲愛好集団が村落共同体でなく都市に基礎を置いていること、函館との交通の要衝であること、県庁所在地としての町づくりの途上にあることであろう。

謡曲は、この地にやってきた多くの愛好家にとって以前から親しく、この地においては新しい文化である。そして藩政時代からの社会的脈絡を失って断絶の危機に立ちながら、新しい脈絡を得て能を復活した青森市の能役者たちの様相は、全国各地の能役者たちと共通するのではなかろうか。

参考文献

青森駅開業百周年実行委員会（編）
　1991　『青森駅百年史』青森：ＪＲ東日本株式会社青森駅：17-21.
青森県
　2003　『青森県史　資料編近現代２』青森：青森県：769.
朝比奈　隆
　2001　『楽は堂に満ち』東京：音楽之友社：16-25.
　1985　『朝比奈隆　わが回想』東京：中央公論社：４.
五十嵐　栄吉（編）

1987『大正人名辞典　上』東京：日本図書センター：437、底本『大正人名辞典』第 4 版　1918　東京：東洋新報社.

板谷　八郎

1969「藤原柯芳」東奥日報社（編）『青森県人名事典』青森：東奥日報社：584.

梅原　稔

1934　「青森に於ける謡曲」『青森県宝生誌』青森：青森県宝生流親謡会：11-58.

奥山　けい子

2006　「村落社会における小謡と能—東北地方の事例から」『お茶の水音楽論集　特別号　徳丸吉彦先生古稀記念論文集』東京：お茶の水音楽研究会.

加藤　射水

2002　「梅原稔」　東奥日報社（編）『青森県人名事典』青森：東奥日報社：77.

金沢能楽会 100 周年記念事業実行委員会（編）

2000　『金沢能楽会百年の歩み　上』石川：金沢能楽会：16-19、21-24、457.

金子　郡平；高野　隆之

1914　「高木直衛」『北海道人名辞書』北海道：北海道人名辞書編纂事務所：290.

河東　碧梧桐

2008　「一日一信」『河東碧梧桐全集第 15 巻』東京：短詩人連盟：239-240.

倉田　喜弘（編著）

1995　『明治の能楽 2』東京：日本芸術文化振興会：282.

1996　『明治の能楽 3』東京：日本芸術文化振興会：145、150、187.

1998　『大正の能楽 2』東京：日本芸術文化振興会：39.

古林亀治郎（編）

1987　『明治人名辞典下巻』東京：日本図書センター：ア 9-ア 10、底本『現代人名辞典』第 2 版、1912　東京：中央通信社.

国立劇場能楽堂調査養成課

1988　『魚町能楽会所蔵　能面と能装束』国立劇場能楽堂調査養成課（編）、東京：国立劇場.

肴倉　弥八

1969　「小田桐勝英」『青森県人名大事典』青森：東奥日報社：122.

「渋谷七重」同 300.

佐野　巌

1923 年　「因縁—加賀宝生の今昔（十二）」『宝生 2 巻 7 号』29.

高橋　良子

1999　「紀淑真」西野春雄；羽田昶（編）『新訂増補　能・狂言事典』東京：平凡社：378、初版 1987 年.

寺田　裕一
2003　『私鉄廃線25年』東京：JTB：36.
豊橋市史編集委員会
1975　『豊橋市史第2巻』豊橋：豊橋市：951.
豊橋市史編集実行委員会
1983　『豊橋市史第3巻』豊橋：豊橋市：A662、B644-663、C1037.
長山　直治；西村　聡（編著）
2005　『大鼓役者の家と芸―金沢・飯島家十代の歴史―』金沢：飯嶋調寿会：324.
波多江　久吉；斎藤　康司（編）
1977　『青森県りんご百年史』青森：青森県りんご百年記念事業会：80.
南　勉
2002　「小舘保次郎」東奥日報社（編）『青森県人名事典』青森：東奥日報社：253.
宮城　道雄
1972　『定本宮城道雄全集　上』東京：東京美術：116.
村上　宗之
2001　『蒲鉄ものがたり　走った運んだ７７年』新潟：新潟日報事業社：13-14.
横山　杣人
1926-29　「能楽師過去帳」『謡曲講座　第2期第14分冊』東京：謡曲講習会：79.
Anonymous 1
1990　「八戸宝生会の誕生」『八戸宝生会誌』八戸：八戸宝生会：20.
Anonymous 2
1934　「野辺地謡曲史」『青森県宝生誌』青森：青森県宝生流親謡会：194-6.

おくやま　けいこ
東京成徳大学人文学部日本伝統文化学科教授。お茶の水女子大学大学院博士課程人間文化研究科単位取得退学。国立能楽堂を経て現職。